

教育実習に関する資質保証のための

チェックリストの改善

藤木 卓（長崎大学教育学部）
寺嶋 浩介（長崎大学教育学部）
森内 秀学（長崎大学教育学部附属小学校）
田下 寛正（長崎大学教育学部附属中学校）
高谷 有美（長崎大学教育学部附属特別支援学校）
松野 絵理（長崎大学教育学部附属幼稚園）

1. はじめに

教育実習（本学部での、教育実地研究・実習）における学生の教師力育成は教員養成学部にとって大きな課題であり、様々な大学が様々な取り組みを行っている。島根大学教育学部では、教育実習を含んで 1000 時間の体験学習プログラム（社会体験、学校体験、臨床体験）が必修化[1]されている。群馬大学教育学部では、1年次の教育現場体験学習、2年次の授業実践基礎学習、3年次の教育実習（附属学校等での 5 週間の実習と、公立学校での 3 週間の実習で構成）が必修化[2]されている。また、鹿児島大学教育学部では、1年次の教職基礎研究、2年次の教職実践研究 I・II、3年次の教育実習、4年次の教職応用研究等の実践的科目により、高い実践力を併せ持つ教師の育成を意図[3]している。その他、多くの教員養成系大学・学部が、教師力育成や向上のために何らかの取り組みを行っていることは、想像に難くない。

本学部においても、寺嶋らによる教育実習の改善を目的とした取り組みが行われている。体験を重視した教育実地研究カリキュラムの構成要素に関する研究[4]では、本学部において体験を重視して導入されたカリキュラムである教育実地研究・参加観察実習、同・主免実習、同・副免実習の内容を分析し、体験型の実習に共通する教育方法として、コミュニティへの参加と指導技術の向上が挙げられることを明らかにしている。そして課題としては、教育実地研究内に限らず、教育実習での成果が次の実習や事後指導、学部の他の授業にどのように関連付けて活かせるかという、学部の全体カリキュラムとの整合性を図る必要があることを指摘している。以上の研究を受けて次に行われた教員養成のための資質リストの開発に関する研究[5]では、『教育実習全体で育てるべき学力を明確にし、それに沿って学習者が評価される（あるいは自己評価する）必要がある』観点から、校種間の違いを踏まえた教員養成に必要な資質チェックリストの開発・評価を行っている。開発されたチェックリストでは、基本的素養、参加観察実習、教育実習

(勤務, 生活指導・学習指導, 教科(保育)研究, 学習指導(保育), 研究課題)の, 大きくは3観点, 教育実習内の小観点も考えると7観点について, 計69項目が示されている。また, それらの項目に対する附属学校園教員による評価では, 一部実習中では育成が難しい項目があるものの, 妥当性に関する高い評価が得られたことが述べられている。そして課題としては, さらなるチェックリストの改善とともに, 『このリストを使っていかに学生の資質を高めるか』を検討する必要のあることや, 学部カリキュラムとの関連性を考えた資質育成の場の検討が必要であることを指摘している。

以上のような背景及び先行研究を踏まえ, 本研究の方向性を次のように定めた。すなわち本研究の目的は, 教育実習中に学生が使用することを前提とした教育実習に関する資質確認のためのチェックリストの改善である。

2. チェックリスト改善の指針

現行のチェックリストは, 学生が実習の際に行う場面に応じた項目設定[5]となっており, 授業経営や学級・学校経営の視点が未分化ではあるが, 実習に限った資質のチェックに限定すれば, 他大学(寺嶋らの論文[5]では, 横浜国立大学及び北海道教育大学のものとの比較がなされている)のものと比べて, 使い易いと言える。今回の教育実習に関するチェックリストの改善に当たり, 本学部における附属学校園での教育実習の効果を最大限に高めることを意図して, 「教師に必要な資質リスト」を作成するのではなく「教師に必要な資質のうち教育実習で育成すべき資質リスト」の作成を行うという現行チェックリストの方針を踏襲することとした。また, 幼稚園や特別支援学校に特化した内容の実習が存在することや, 学習指導に含まれるけれども教科の専門性に関係する資質の取扱いをどのようにするかが議論となったが, 4 附属学校園に共通する最低限の資質チェックを行うためのリストを作成し, 不足するものについてはそれぞれの学校園で追加することとした。

そこで, 現在のチェックリスト 69 項目からできる限り減らし, 実習生が日常的にリスト項目を頭に置いて利用できる項目数と項目内容に整えることを目指した。そのために現在のチェックリストの項目を吟味し, 内容が重複するものの整理統合, 現行の附属学校園における実習では育成が難しいものの削除を中心に, 改善を図ることとした。

3. 改善されたチェックリスト

改善されたチェックリストを, 表1に示す。

改善版チェックリストでは, カテゴリーを「基本的素養」「子どもへの対応」「学習指導への対応」「実習生や教員への対応」「課題/研究レポート」の5つとした。また, 現行のチェックリストで存在した「参加観察実習」カテゴリーや「教育実習カテゴリー」中の「勤務」「教科(保育)研究」等の小カテゴリーは, 「基本的

表 1 改善されたチェックリスト

カテゴリ	項目
1 2 3 4 5 基本的 6 素養 7 8 9 10	礼儀正しく、謙虚な態度で人と接することができる。 場に応じた服装や言葉遣いができる。 時間を守って行動することができる。 心身共に健康であり、健康管理ができる。 人と協力して行動することができる。 向上心を持って、積極的に行動することができる。 明るく笑顔で人と接することができる。 マナーやルールを守って行動することができる。 身の回りの整理整頓ができる。 計画性を持ち、仕事を遂行できる。
11 12 13 14 15 16 17 18	子どもを、客観的に捉えることができる。 子どもを、多面的に捉えることができる。 子どもを、公平に捉えることができる。 子どもの健康状態を、的確に捉えることができる。 優しさと厳しさをあわせ持ち、臨機応変に子どもへ対応することができる。 子どもの思いを受け止め、共感することができる。 子どもと真剣に向き合い、根気強く対応することができる。 時と場に応じた、子どもの安全管理ができる。
19 20 21 22 23 24 25 26 27 28	自分なりの課題を持って、観察することができる。 子どもの実態を、学習展開に活かすことができる。 適切な目標を設定し、それを達成するための展開や評価の観点を構想することができる。 子どもの発達段階や予想される反応を想定して、展開を構想することができる。 必要な教材・教具や遊具を準備することができる。 子どもの状況に応じて、適切な話し方で発問や助言ができる。 分かりやすい板書や、適切な教材・教具等の提示ができる。 ICT機器の、効果的な活用ができる。 指導過程における適切な評価を行い、結果をフィードバックして、指導や援助を進めることができる。 実施した授業の反省を適切に行い、次に活かすことができる。
29 30 31	他の実習生や教員と、積極的に関わることができる。 他の実習生の授業や保育づくりに、積極的に協力することができる。 他の実習生や教員からの助言や指導を、謙虚に受け入れ活かすことができる。
32	課題/研究レポート 実習を振り返り、視点を基に分析的に書くことができる。

素養」や「学習指導への対応」カテゴリ等へ吸収した。

結果的に、69項目から32項目へ半減させることができ、実習でねらう資質リストとしてより整理されたものとすることができた。

今後の利用に関しては、以下の点に留意して活用を図る必要がある。

- ◎実習場面に応じたものではないため、学生の入学当初に4年間で身に付けるべき資質リストとして提示し、参加観察から始まる実習毎に、それぞれの前後で自己評価させ、資質確認を振り返らせる。
- ◎4 附属校園の全てで、教育実地研究・事前指導及び、同・実習、同・事後指導を通じて、一貫した資質チェックリストとして位置づけ、活用を図る。
- ◎それぞれの学校種や教科等の違いに依存する資質部分については、各校園及び各教科において適宜項目を追加して活用を図る。

4. 課題

チェックリストの改善を通して、課題となったことを、以下にまとめた。

- チェックリストそのものの、妥当性の検討は十分ではなく、今後、実習での活用を図りながら、リストの改善について継続した検討を行う必要がある。

●学生への提示の時期や場面，自己評価の時期や場面，振り返りの方法等，実際の運用に関する合意について，教育実習委員会及び4附属校園で共通理解を図る必要がある。

●教職大学院において育成すべき資質や，教職実践演習で確認すべき資質，コア・カリキュラムをはじめ学部で開講されている授業等との連続性や関連性を検討しつつ，本学の教員養成課程及び大学院まで含めたチェックリストを開発する必要がある。それにより，学部と大学院との接続を密にし，より質の高い教員養成システムに発展していけるものと考えられる。

5. おわりに

教育実習中に学生が使用することを前提とした，資質確認のためのチェックリストの改善を行った。本研究のための主な活動は，本学部の教育実習委員会内に設置された教育実地研究検討部会において行ったため，部会員での成果としてまとめることとした。また，ほぼ同時期に，GP申請を前提とした教育実習改善のプロジェクト（代表：鈴木慶子教授）が立ち上がり，学部の研究企画委員会に加えて教育実習委員会からも参画している。本学部における学生の資質向上につながる大きな流れになることを期待しつつ，まとめとする。

なお，本研究の一部は，平成21年度の学部長裁量経費，並びに，教育学部附属教育実践総合センターの支援を受けた。記して謝意を表す。

参考文献

[1]島根大学教育学部の理念

<http://www.edu.shimane-u.ac.jp/edu/gakubu-rinen.html>

[2]群馬大学教育学部 教育実習

http://www.edu.gunma-u.ac.jp/jp/kyoiku_jisyu/directedteaching.html

[3]鹿児島大学教育学部 特別教育研究経費事業（平成19年度～平成21年度）
平成20年度中間報告書（2年次）

[4]寺嶋浩介，小原達朗，古野祐一，坂口洋介，田中秀明，寺田弥寿子，中里かをる，高谷有美(2006) 体験を重視した教育実地研究カリキュラムの構成要素－長崎大学教育学部附属4校園を対象とした分析を通して－. 長崎大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 第5号,1-12

[5]寺嶋浩介，林朋美，田中秀明，原京子，寺田弥寿子，中里かをる，高谷有美，坂口洋介，小原達朗，龍造寺裕則（2007） 教員養成のための資質リストの開発－学部と附属校園の共同研究を通して－. 長崎大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 第6号,49-58